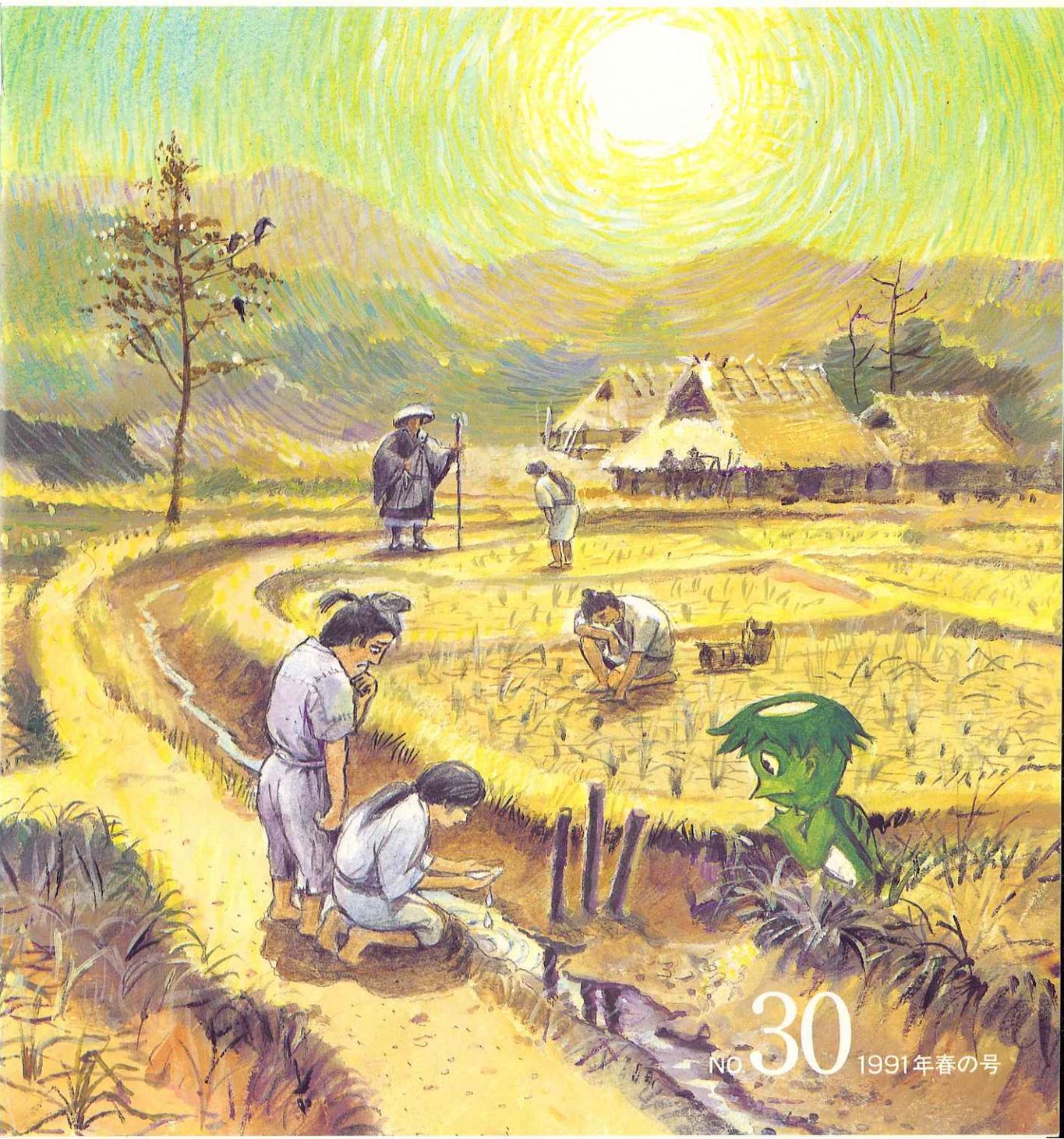
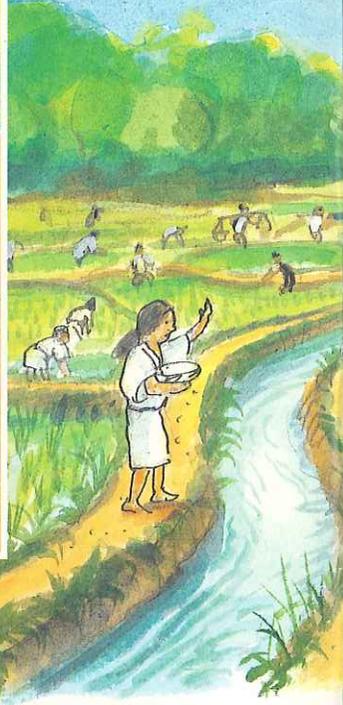
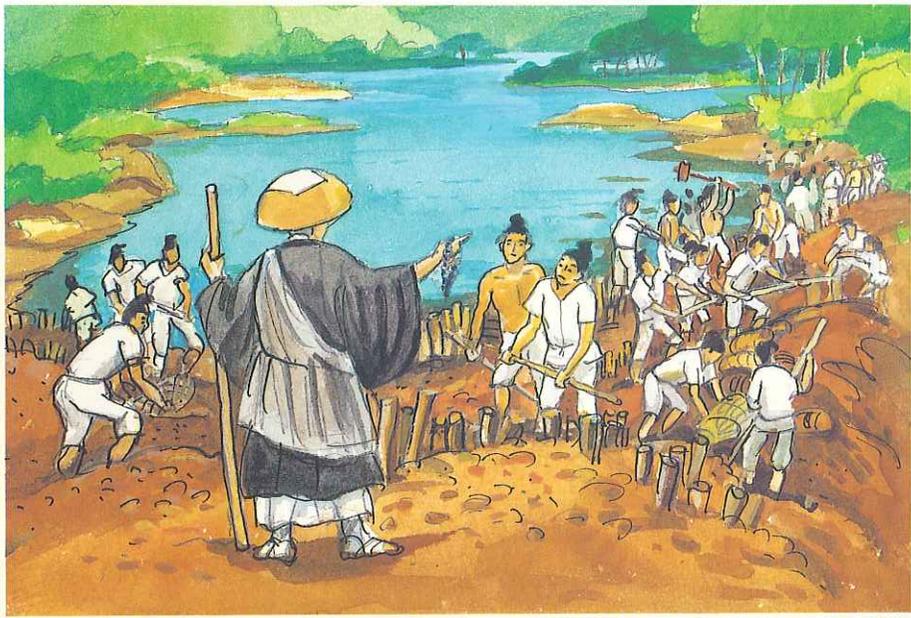


# 川の本

『川と人びとの暮らし』—③ 江戸時代までの川の利用—



NO. 30 1991年春の号



## まんまんのういけのういけ 水不足を救った満濃池

昔の人びとは、水を利用しやすい小さい川のほとりに住み、そこに水田を作りました。

しかし人口がふえてくると、水を利用しにくいところにも水田を広げ作物をつくる必要がでてきました。作物を育てるために、川から水をひいて土地をうるおすことをカンガイといいます。新田を開くために人びとは川から水をひくことに努めてきました。川の水の利用は、田畑のためだけではなく、飲み水にも、水車をまわすのにも、洗濯にも、舟運にも欠かすことはできません。人びとのくらしは、洪水の被害を少なくして、川の水をどれだけ上手に利用するかにかかっていた。

香川県の丸亀地方は、もともと雨が少なくて大きな川もありません。

昔ここで稲作を始めた人びとは、毎年のように水不足に悩まされてきました。ところによっては、水の配分をめぐって、村と村が争う「水争い」までおこりました。そのため、水を分けるきびしいきまりを作ったりもしました。きまりを破った者は、重い罰をうけました。いくらきまりを作っても、日でりが長く続き川の水が乏しくなると、全部の田に水がゆきわたらなくなります。

そこで人びとは、新田を開くため川をせきとめ、溜池ためいけをつくり川の水を有効に使いました。

しかし溜池はこわれやすいものでした。

あるとき、弘法大師(空海)は溜池がこわれ水がかれて荒れ果てた田をみました。

弘法大師はよわりきった村びとはをばげましさしづ指図して、こわれた溜池を立派につくりかえました。これが満濃池とよばれる溜池で奈良時代(821年)のことでした。

満濃池は、讃岐山脈から流れ出る金倉川の水を、しっかりと貯え、日照りがつづいても水田に水を送ることができるようになりました。その後もいくたびか改修が行われましたが、今では土器川の水も取り込み、讃岐平野の水田に水をおくっています。

このような溜池は、古くから全国各地に数多くありますが、代表的なものとして弥生時代末期大和川筋上流の蛙股池(奈良市)、大和時代中期の石手川筋一番池(松山市)、飛鳥時代初期の別府川筋住吉池(鹿児島県)、平安時代初期の紀の川筋風呂谷池(和歌山県)、慶安3年の天白川筋の牧野池(名古屋市)などがあり治水とカンガイを目的としたものでした。



これが満濃池だ  
溜池は、小さな川の水でも  
しっかりと貯めてくれる  
まるで水の銀行だね

## 弘法大師と水の伝説

ある日、一軒の家に立ち寄った旅のお坊さんが、「水を一杯のませてください」とたのみました。おかみさんは機織の手をとめて「はい、しばらくお待ちください」と、きげんよく立ち上がり、水をくみに行きましたが、なかなか戻ってきません。待っていると、やっと戻ってきたおかみさんは、冷たい水をさし出しながら「たいへんお待たせいたしました。このあたりは高台で水がなく、遠くまでくみに行かねばならないのです」と申しました。旅のお坊さんは、親切なおかみさんをあわれに思い、「それでは水を出してあげましょう」と、あたりを見回していましたが、「ここを掘れば、水が出る」と杖で地面をさしてたちさりました。言われた通り、そこを掘ると、冷たい水が湧き出してきました。旅のお坊さんは弘法大師（空海）でした。

このような話は全国各地にたくさん残っていますが、この話からも昔の人びとにとって、川からはなれてくらすことがどれだけ大変であったかがよくわかります。



台地など高い土地では、すりばち型に広くほり、カツムリのようにうずまき型の道をつけ、その底に井戸をほりました。これが「まいまい井戸」です。地域の人たちが協力して掘り、大切にかんりしたそうです。



## 武蔵の荒地を豊かにした見沼代用水

昔の関東平野は利根川のたびかさなる洪水のはんらんで沼地の多い荒れた土地でした。

徳川家康は、利根川の流が東京湾にそそいでいたのを、千葉県の銚子から太平洋に流れ出るように、何10年もかけて治水工事をおこないました。このため荒地であった関東平野も新田をつくることになりました。

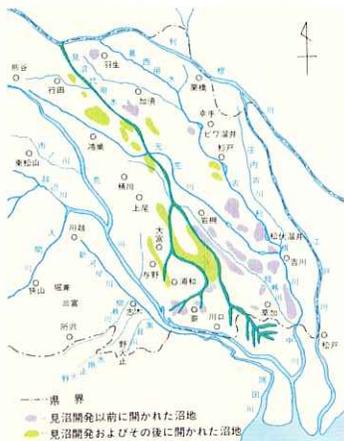
享保12年(1727年)、新田をもっとふやしたいと考えた幕府は、井沢弥惣兵衛いざわ やそうへい ためながにその役を命じました。為永は、新田を開くためこれまで近くの水田の水源となっていた広大な見沼溜井かんたくしを干拓し、見沼溜井の代わりに利根川の水を今の埼玉県行田から引きこむ用水路を造りました。これが見沼代用水です。

84kmもの長いこの水路は、他の川とまじわる所では掛渡井かけとで渡ったり、伏越ふせこしでくぐり抜けてこれまで水のとどかなかった高台にまで水を運びました。

このおかげで荒地だった武蔵の国は、みちがえるほど豊かな水田地帯に生まれかわったのです。カンガイされた面積は、14,000ヘクタールあまり、そこで水田を開いた村が300村以上という広大なものでした。

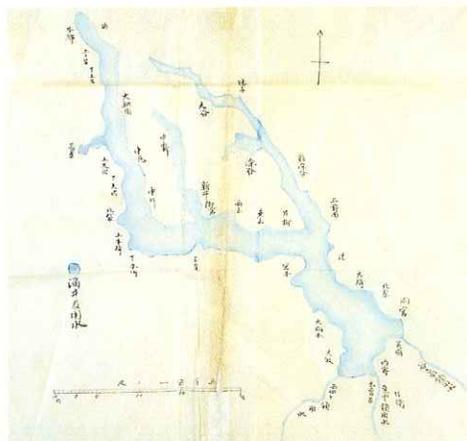
それだけではありません。用水は粉ひき水車も回しました。洗濯の水や村の防火用水にもなりました。お魚も養いましたし、舟を通す水路ともなりました。そして260年後の今なお、関東平野をうるおす大用水路として活躍しています。

見沼代用水と新田

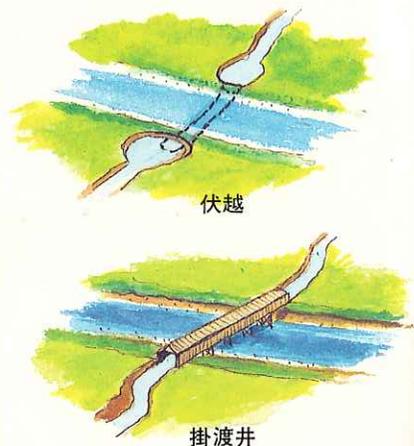


出所：埼玉県立文書館資料案内第12号

見沼溜井図



出所：埼玉県立文書館保管見沼土地改良区No.454





やいカッパ、おらあ江戸っ子だい！  
 なんとって水道の水でうぶ湯をあびたんだぞ。



## 江戸の町には水道があった

「江戸時代にまさか水道なんて。」と思われるでしょうが、本当に水道があったのです。しかしそれは、今のような蛇口をひねればジャーツと水が出てくる水道ではありません。

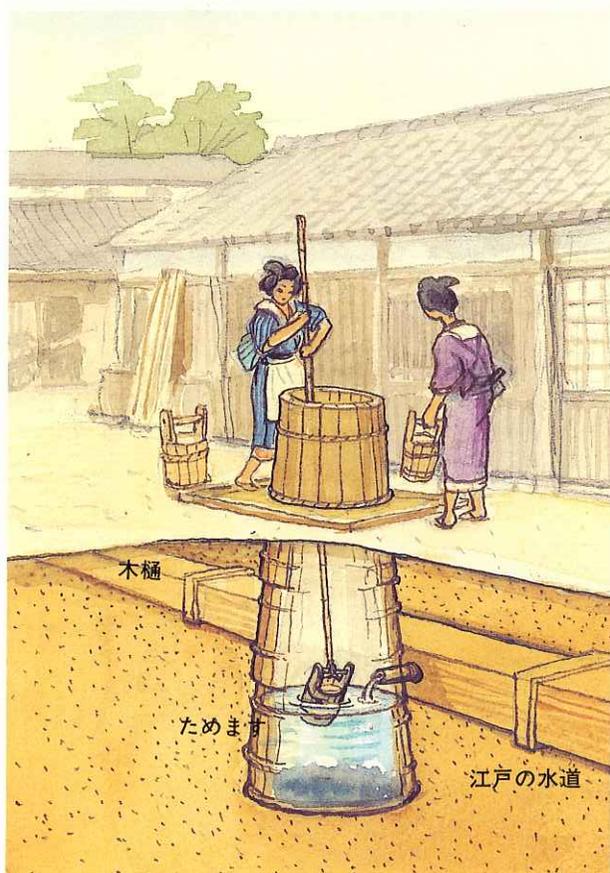
飲み水専用の水路を上水じょうすいといいますが、江戸の町には、立派な上水がひかれていたのです。江戸の町の人口がふえると、井戸水の水質も悪くなるうえ、湧き水だけでは間に合わなくなりました。又うめたて地の下町では、井戸の水に海水が混じり、飲み水には使えません。このような江戸の町に飲み水を運んだのが神田上水（寛永20年・1640年）です。

武蔵野台地の東の低地に湧きだしてできた井の頭池、妙正寺池、善福寺池の水を一緒にして、22kmもの人工の川をつくり江戸の小石川（関口）の大洗堰まで流しました。ここから、後楽園の水戸やしきを通りぬけた水は、水道橋で木樋（木の水道管）を使って神田川の上をこえ、江戸の中心部から下町の方まで送りこまれたのです。江戸の町中は石樋（石の水道管）や木樋をつないだものをうめ、ところどころに“ためます”を作り、そこから水をくみ上げて使うしくみになっていました。

しかし江戸の人口は増えつづけ、人びとの生活雑排水が上水の水質をわるくしたり、神田上水だけでは水の量が間に合わなくなりました。

そこで新しく多摩川の水を上流の羽村から四谷まで42kmもの間を大へんな苦労を重ねて引きました。これが玉川上水（承慶3年・1654年）です。

上水は江戸だけではなく、甲府上水、富山水道、福井芝原用水、近江八幡水道、駿府用水、米沢御入水、赤穂水道、鳥取水道など各地でぞくぞくと上水道がつくられました。







## 淀川の河口のにぎわい

上の絵の右上に見える大きな舟は、海路に使われた舟で、手前の運河(川)では高瀬舟が行きかいました。川から海へ、海から川へと荷が運ばれました。



米俵をつむ高瀬舟

## あそびのコーナー



水路のあちこちに俵があります。  
 同じ水路を2度通らないで全部の俵を集めてください。  
 交差点は2度通ってもかまいません。どこから出発してもかまいません。

ヒント 一筆がきのようりょうでやればできるよ。出発地点がもんだいだ。

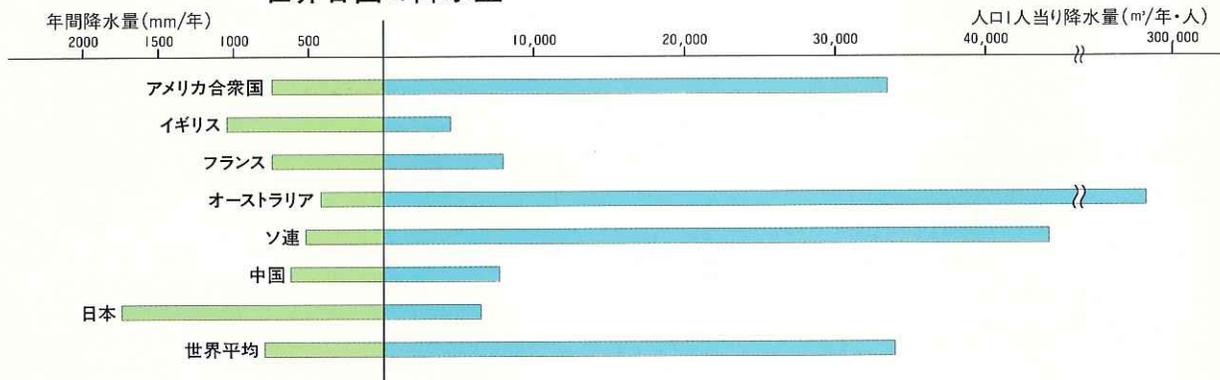


## 日本の国は雨が多い国ですが……

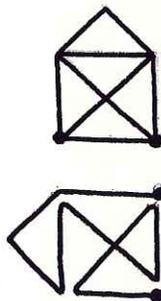
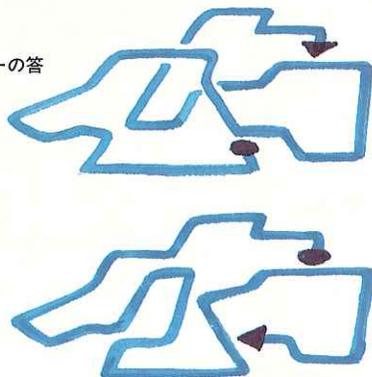
日本の年平均降水量は欧米諸国の約2倍となっていますが、1人あたりでは1/6です。さらに日本の川は、水源から海までの距離が短く、急勾配のため、せっかく降った雨はすぐ海に流れてしまいます。ですから水を貯え、水不足にそなえる努力が日夜つづけられています。水は大切に使いたいですね。



## 世界各国の降水量



あそびのコーナーの答



黒丸地点から出発すれば  
全部の水路を1回で回れます。

左の一筆がきの図の  
変形ですから、答は  
いく通りかあります。  
何通りあるか、たし  
かめてください。

### 河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- \* よりよい水辺のプランニング
- \* 楽しく安全に遊べる川づくり
- \* 川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- \* 未来の水辺を考えた調査や研究
- \* せせらぎ・ふれあい基金



財団法人 河川環境管理財団

(〒160) 東京都新宿区新宿5丁目17番5号  
TEL. (03) 3200-5677(代表)

監修 建設省河川局